

市橋文庫蔵『弥生日記』 訳注

愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。『弥生日記』は、卓池・秋拳の両名が、文政七年三月に岡崎花園山に滞在した記録を同年五月に刊行したものである。その内容は、序文で花園山到着までの経緯を述べた後、二人が弟子の家に落ち着き、俳諧五十韻を張行するところからはじまり、三週間余りの間、ひきもきらず尋ねてくる門人たちの句をはさみながら、滞在中の折々の風雅を語り、最後にまた両者の歌仙を置き閉じられている。滞在の様子が日記風に描かれ、滞在中に作られた句を時系列に従って記述していく形式を取っている作品である。

稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、俳諧の盛んであった名古屋を中心とした地域において生み出され刊行された作品として、この『弥生日記』の読解に取り組むこととした。月に一度の輪講により読みすすめているが、今年度の年報原稿は、輪講の成果の中から、序文と冒頭の卓池・秋拳の五十韻のうち第十八句までをとりあげた。

なお、書誌調査や本文の検討は、稀書の会のメンバーが輪番で担当し、稀書の会参加者による複数回の討議を経た後にあらためて年報用に成稿している。調査担当者、輪読の際の発表者の名を担当箇所の末尾に記した。

【愛知県立大学附属図書館蔵『弥生日記』書誌】

表紙 原裝纏色^己繫型押表紙 袋綴 23.4 cm×15.9 cm 全十五丁。

題簽 左肩单边（代赭色料紙、後補か）「弥生日記」15.6 cm×2.9 cm。

序題 「弥生日記」。

序 無辺無界七行×十五字前後。字高12.8 cm 一丁。

本文 無辺無界八行。字高 二丁表7.4 cm 二丁裏以降14.0 cm 十四丁。

柱 第二丁より「序」、①（十四）。

印記 一丁表右肩に朱印「□馬風涼」、墨印「市橋文庫」、ほか円形朱印、裏見返左下に朱印「□土」（□は同字であるが不明）。

刊記 裏見返「文政七甲申年仲夏／製本所名古屋本町九丁目本屋久兵衛」。

備考 丁付と丁数は一致していない。ここに挙げていいるのは、実際の丁数である。また、第九丁と第十丁との間に、調査者によると思われる以下の挟み込みがある。「増補」酒堂の「市の庵」出づ／前文略／稻妻や夜あけて後も船こ、ち」。なお、同刊本が鶴舞中央図書館にも所蔵されている。（狩野一三）

【凡例】

一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（ICHI・142）本である。
一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割・本文改訂をなした形でとりあげた。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補った。翻字本文を適宜参照された。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準

的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付し、前句を添えた。

一、訳注においては、【語釈】、【二句立】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

【翻刻】

弥生日記

花ものいはねとよく人とと、む

そのと、めらる、花をこそたつねめ

とまつ八橋の沢辺にさまよひ

きてあかぬ衣の里に一夜袖かた

しきてかすみかくれの岨道つたひ

に花園山の麓に出てやすらふ

こ、にこのもしき家ありあるしの

いふやう我薪水のたすけをなさん

明暮の花にめをよろこはしめ給へと

いふ応と諾して膝をいるれは

「(一才)

花に清香あり月に陰ありて
さらに過行日数もおほえす

蓬畢蘆

林鬘非一状

水石有余態

けにこゝこのもしきすみか

なりけりけふハわけて清暇

歓娛をなす日

初懷紙

鶴の歩みの調にならふ

「(二ウ)

花に虻けさをおもへは日の永し

草すきかへす礮田幾代

王箒くれゆくはるを掃とめて

厨使^{クシヤ}やひまなかるらむ

其あたりまはゆかりつる天津鴈

楸^{ヒサキ}まはらに明わたる月

後園にわけて富たる水葵

名残奇麗に遊ぶ酒こと

秋拳

卓池

拳

池

拳

池

拳

池

「(二オ)

「(二ウ)

みてくらはつふねかしらにもたせやり 拳

我ま、ゆるす真間の橋守 池

世にあはぬ恋のしなしを置霜に 拳

あらはれてうき宵の里下り 池

胸のほむらさまさは律潦 拳

死なぬむしなら初蟬になれ 池

鶯は音をいれきはもさすかにて 拳

高い下駄はく戸隠の僧 池 「(三才)

稲妻を月出るまでの想像 拳

風ひやくとはまつ、ら吹 池

【注釈】

【序文本文】

弥生日記

花、もの言はねどよく人をとどむ。そのとどめらるる花をこそたづねめと、まづ八橋の沢辺にさまよひ来て、あかぬ衣の里に一夜袖かたしきて、霞がくれの岨道づたひに花園山の麓に出でてやすらふ。

ここに好もしき家あり。あるじの言ふやう、「我、薪水の助けをなさん。明暮の花に目をよろこばしめ給へ。」と言ふ。応と諾して膝をいれるれば、花に清香あり、月に陰ありて、さらに過ぎ行く日数もおぼえず。

蓬畢蘆

林巒非一状

水石有余態

げにここ、好もしきすみかなりけり。今日はわけて清暇歎娘をなす日。

【語釈】●花、もの言はねど 花は物を言わないが。史記の「桃李不言下自成蹊」（『史記』李將軍伝贊）をふまえ、こ

こでは「花」を桜の花と見て述べている。「故郷の花の物言ふ世なりせばいかに昔のことを問はまし」（後拾遺集・春下・世尊寺の桃の花を詠み侍りける・130・出羽弁）。「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」（徒然草・第二十五段）。

●八橋 愛知県知立市の東部、逢妻川の南の地名。歌枕。伊勢物語の東下りの章段で、在原業平がカキツバタの五文字を入れて和歌を詠んだところ。周辺には、在原寺、業平塚がある。「から衣きつつなれにしつまにあればはるばるさぬるたびをしぞ思ふ」（伊勢物語・第九段）。●来て、あかぬ衣の里 ここでは（八橋の沢辺に来て）（着て飽かぬ衣）。

（来て飽かぬ衣の里）とかけているか。●衣の里 愛知県豊田市の旧称。豊田市中心部の旧称を「拳母」といい、『和名抄』に記された尾張国賀茂郡八郷の名の一つに拳母郷が見える。●袖かたしきて 衣の片袖を敷いて寝ること。ひとり寝のさまをいう。「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む」（新古今集・秋下・518・藤原良経）。

●薪水 薪を採り水を汲むこと。炊爨スイサシの事をいう。●膝をいる、（その家の中に）身を置く。「審容膝之易安」（陶淵明「帰去来辞」）。●花に清香あり、月に陰あり 蘇東坡の「春夜」の句。花には清らかな香りがただよい、月はおぼろに霞んでいる。「春宵一刻直千金 花有清香月有陰」（「春夜」蘇東坡）。「春宵一刻值千金、花に清香月に影」（謡曲「西

行桜」）。●蓬畢オヒシノ蘆 草屋。粗末な住家。●林巒リンラン 林と山。●一状 同じ形。●水石 水中にある石。また、水と石。

●余態 豊かな形。●歎娘 よろこびたのしむこと。歎楽。ここでは定まらない自然の有様に心を引かれて楽しんでる。

【現代語訳】花は物を言わないけれど、人の心を引きつける魅力があり、足を止めさせる。そのように心引かれる花をこそたずね求めようと、まず八橋の沢辺をあちこちさまよい歩いた。次に、着ていて飽きない衣のように、何度訪ねても飽きることがない衣の里を訪れ、一晩ひとり寝をし、霞におおわれた細くてけわしい山道をたどり、花園山の麓に出

で一息ついた。ここに感じがいい家があった。主が言うことには、私が滞在の手助けをしましょう、明け暮れ、花をこらんになり、目を楽しませなさってくださいと。ありがとうと応じて家に入れば、花には清らかな香りがただよい、月は朧にかすんで、月日が経つのも完全に忘れてしまう。

草屋にて

林や山はどれも形状が違っていて同じ形ではない。また水や石にはさまざま姿があつて、いずれも興が尽きない。まことにここは好ましい住まいだ。今日はとりわけ、俗にわずらわされることなく静かに喜び楽しむ日だ。

(名倉ミサ子)

【五十韻】

初懷紙

鶴の歩みの調にならふ

初表一(発句) 花に虻今朝を思へば日の永し

秋挙

【式目】 春(花・虻・日の永し)

【作者】 秋挙

【語釈】 ●初懷紙 年頭にはじめて懷紙に記した連句のことをいう。次項にいう「鶴の歩み」百韻は、「初懷紙」と称して古来有名であった。「貞享三のとし丙寅に普子日の春の百韻初懷紙と号して世に鳴ことひさし」(『鶴の歩み』鶴歩奥書)。●鶴の歩み 「鶴の歩み」百韻。貞享三年正月に芭蕉が門人其角、杉風らと張行した百韻。発句「日の春をさすかに鶴の歩みかな(其角)」から、「日の春を」百韻とも言われる。前半五十韻には芭蕉自ら加えたという評注があり、蕉風俳諧のあり方を示す重要な百韻とされている。●虻 あぶ科の昆虫。はなあぶ、ひらたあぶなど。ここは「あぶ

(逢ふ)と掛けるか。「二月…虻」(毛吹草卷二「俳諧四季之詞」)。「花…虻」(毛吹草卷三「付合」)。「花にあそぶ虻なくらひそ友雀」(続の原・芭蕉)。「虻蠅のしらぬにほひや苔の花」(青々処句集・165)。**●日の永し** 一日(の日照時間)が長い。弘化四年(一八四七)、秋拳の二十三忌の記念として編まれた『曙庵句集』では「日のながき」である。「末の春の詞 一、永き日」(至宝抄)。「山の湯やだぶりだぶりど日の長さ」(一茶集・発句篇・348)。

【現代語訳】

初懐紙の「鶴の歩み」の調子にならって。

花に誘われて虻がやってくる。そんな美しい桜が花ひらいた今朝を思い、のどかな様子に一日が長く感じられることだ。

【考察】弟子東雅篇の『曙庵句集』に入る。

(伊藤伸江)

花に虻今朝を思へば日の永し

初表二(脇) 草すきかへす磯田幾代

卓池

【式目】 春(すきかへす)

【作者】 卓池

【語釈】**●すきかへす** 春になり、田畑の土を掘り返す。「すきかへす門田の牛のあゆみまでくるる日かげにつるる遅さよ」(今川為和集四・田家・1556)。「すきかへす田面の草をとりそへてあれたる庵や春にかこはん」(黄葉集・田家春・1540)。**●磯田** 岩礁の多い水際にある田。「ひよろひよると磯田の鶴も日永かな」(七番日記・一茶)。「初雁の瘦て餌をはむ磯田哉」(半化坊発句集・419・雁)。「なはしろに鶺鴒追るる磯田かな」(しら雄句集・春・201)。**●代** 田植えをするために耕した田の区画を「代しろ」という。「早苗とるかたやいくしろ五月雨にみだれて出づる田子がすが笠」(琴後集・題

画歌・「雨降る日人おほく早苗とる」・1364)。ここは、春の日の長さを、耕す田の広さにおきかえて示している。

【一句立】 冬の間に生えた草を鋤返す磯辺の田は、どのくらいあるのだろうか。

【現代語訳】（前句）桜の花が咲き誇り、虻が花に誘われてやってくる、のどかな一日の長さよ。そんな一日に、冬の間に生えてしまった草を掘り返す磯辺の田は、どのくらいの広さなのだろう。

（伊藤）

草すきかへす磯田幾代

初表三（第三）玉箒暮れゆく春を掃きとめて

秋挙

【式目】 春（くれゆく春）

【作者】 秋挙

【語釈】 ●玉箒 玉を飾りにつけた箒。正月初子の日に、皇后が蚕室を掃き清め蚕神を祀る際に用いるもの。一句では「玉箒」はほうき的美称として使われている。「初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらく玉の緒」万葉集・4493・大伴家持、新古今集にも採録。「忘れめや祝ふはつねの玉箒塵だにすゑぬ宿のまごめは」（琴後集・長枝が家の子日に・36）。「春は子日を祝ふ年々／賤が飼ふ此の比とれる玉箒」（竹林抄・雑上・1227・能阿）。なお、版本では「玉」の部分が「王」となっているが、「玉」に訂正した。●暮れ行く春 暮れていく春。「藤づるや暮れ行く春の惜しみ繩」（崑山集・春・2043）。

【一句立】 美しい玉箒で、暮れて行く春を掃きとめようとしていて。

【現代語訳】（前句）春になって草を掘り返している磯辺の田は、どのくらいあるのだろうか。（子の日には、鋤と箒で祝うものだが、鋤を使って新たな田を作る様子が一方にあり、また、美しい箒といえは、暮れていく春を惜しみ、それを使って、掃きとめていくかのようなのだ。

【考察】 古く中国では、正月最初の子の日に天子自ら田を耕す帝王躬耕の儀式、また皇后が三月に蚕室を掃き、神を祀

る后妃親蚕の儀式があった。これが日本に伝わり、いずれも正月最初の子の日におこなわれる儀式となった。正倉院には、天平宝字二年（七五八）正月の初子の日（三日）に使用された「子日手辛鋤」と「子日目利箒」が伝わっており、語釈にあげた万葉集の家持の歌は、その際の歌である。脇から第三への付合は、「すきかへす」より「鋤」を連想し、初子の日の「鋤」と「玉箒」を一对として思い浮かべたものである。一句では春の終わりの句となる。

芭蕉によれば、第三の体は、発句、脇と続いた景を変化させ、格調高く句をつくるものである。「第三の体、長高く風流に句を作り侍る。発句の景と少し替りめあり。」（「鶴の歩み」百韻芭蕉評注）。秋挙も第三で品格を保ちながら景を変えていく。

なお、脇から第三への付けのみならず、第七句「楸」、第十句「真間」と、万葉集歌を思わせる語句がよく見られる。卓池と秋挙の万葉集に対する教養に注意されることである。

（伊藤）

玉箒暮れゆく春を掃きとめて

初表四 厨使やひまなかるらむ

卓池

【式目】 雑

【作者】 卓池

【語釈】 ●厨 食物調理の場所。台所。「鮫鱈をふりさけ見れば厨かな」（蕉門名家句集（基角）・1719）。「福々し厨に肥えた鯽二本」（蓬亭句集・1940）。●ひまなかるらむ 間をおかずに向かっているようだ。

【一句立】 台所への使いがひっきりなしに出向いているようだ。

【現代語訳】（前句 美しい玉箒で、暮れて行く春を掃きとどめようとしているかのように、あたりを清めていて。）ごちそうを作る台所へは、使いがしきりに出向いているようだ。

【考察】春の終わりの富裕な邸宅での宴の用意の様子。前句を手入れがゆきとどいた邸宅で、あたりを美しくはききよめている様子と見た。「青柳や苔に塵なき玉箒」（発句帳・柳・1054・昌叱）。

（伊藤）

クリヤ
廚使やひまなかるらむ

初表五 そのあたりまばゆかりつる天津鴈

秋拳

【式目】 秋（天津鴈）

【作者】 秋拳

【語釈】 ●まばゆかりつる 目がくらむほどすばらしく、圧倒されるさま。元來は目がくらむほど光が強い様子であり、日の光、月の光、雪明かりなどに使う。次句の例句となるが、次のような連歌もある。「まばゆきは雲に晴れたる月の影／かざす扇も秋のいろどり」（石山四吟千句第百韻・59／60・蒼（三条西公条）／金（大覚寺義俊））。●天津鴈（空飛ぶ）鴈。一句では秋の句。付合では「使」から「鴈」を出した。前漢の蘇武が、匈奴の捕虜になった際に、雁の足に手紙を付けて送った故事による付合。「天津鴈」を詠む句は、鴈の飛ぶ姿が文字に似ていることを言うものが多いが、「廚使」ということを念頭におけば、「天津鴈」は雁料理と考えることもあるいは許されるかもしれない。試みにそう訳しておく。なお江戸期には、雉を筆頭に鶴、雁が食材として珍重された。「三鳥と云は鶴。雁を云也。（包丁聞書）。「雁のいで鳥と云は。足手を落し。水出しと醬油にて不_レ切ににて、食様ニ薄切に作也。」（大草家料理書）。「つらなるや文字ぐさりよき天津かり」（毛吹草・1682・重方）。

【一句立】 あたりがまばゆいほどに明るく見えるような立派な雁の姿。

【現代語訳】（前句）台所へは、ごちそうの催促の使いがしきりに出向いているようだ。おお、まるであたりがまばゆく見えたくらいなの、めったにない大ごちそう、雁料理が出てきたよ。

（伊藤）

そのあたりまばゆかりつる天津鴈

初表六 楸ヒサキまばらに明けわたる月

卓池

【式目】秋（月・楸） 月（面に一、五句去）

【作者】卓池

【語釈】●楸ヒサキ 植物の名。キササゲ、またはアカメガシワというが未詳。歌では山部赤人の万葉歌「ぬばたまの夜のふ

けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しばなく」により、千鳥と組み合わされることが多いが、秋から冬の景物と共に詠まれる。ここは雁の句に月でつないでいる。「楸 初秋也」（産衣）。「初秋 楸」（毛吹草）。「楸 初秋也。只一也。俳には季をかへて今一有べし。初塩は楸風ふくはまべ哉 心敬」（俳諧無言抄）。●明けわたる 夜がすっかり明けて一面に明るくなる。また、霧、雲などが暗れて明るくなる。ここは、後に「月」が続くので、空の雲が切れて、はれわたった月夜の様か。「月夜月夜に明渡る月」（ひさき・30・曲水）。

【一句立】楸がまばらに生え、こうこうと明るく照らしている月。

【現代語訳】（前句 飛んでいる空のあたりが月光を受けてまばゆく見えていた雁の姿。）楸がまばらに生え、あたりを月が明るく照らしている。

【考察】式目では七句目が月の定座であるが、ここは六句目にでる。「七句目 月の定座也。」（俳諧無言抄）。前句一句でも、付合でも、「かり」や「まば」といった同音反復が頻用されている。

（名倉）

楸ヒサキまばらに明けわたる月

初表七 後園にわけて富みたる水葵

秋挙

【式目】夏（水葵）

【作者】秋挙

【語釈】●後園(ごゑん(類船集ルビによる)、もしくはこうゑん、ここでは後者の読み) 家の後ろにある庭園や畑。裏庭。せど。「かたくなやしりへの園に若菜つみかがまりありく翁すがたよ」(夫木抄・春・後園若菜・源伸正・199)。「後園のかたはらをしつらひ隠居住居を立る事おほし」。(俳諧類船集)。「元禄七年のころ、芭蕉の家兄松尾氏の後園に無名庵をいとなみたてし」(随斎諧話)。●富みたる たくさん生えている。前句の楸がまばらに生えているのに対して、水葵は繁茂しているさまを相對付として表現している。ここは現実の様子を詠みこんだか。●水葵 水葵科の一年草。各地の水田、沼などの水湿地に生える。古くは葉を食用とした。夏に青紫色の花をつける。「螢見し雨の夕や水葵」(炭俵・2351・仙花)。

【一句立】裏庭には、とりわけ水葵が生い茂っている。

【現代語訳】(前句 庭には楸がまばらに生え、あたりを月が明るく照らしている。)そして裏庭には、とりわけ水葵が生い茂っている。

(名倉)

後園にわけて富みたる水葵

初表八 名残奇麗に遊ぶ酒事

卓池

【式目】雑

【作者】卓池

【語釈】●酒事 酒宴。「十七日、姉小路亭のもとへ、月みにとて、これかれさそはれしまゝ俄にまかりて、酒事ありしうちに、雨うちそゝぎしかば」(再昌・1996 詞書・永正八年六月十七日)。

【一句立】余韻もきれいに、酒を酌み交わして楽しむ。

【現代語訳】(前句 裏の庭の池にはとりわけ水葵が繁茂しているこの屋敷で、) そんな景色を見ながら、最後まで乱れることなく、品のよい酒盛りをして楽しむことだ。

(名倉)

名残奇麗に遊ぶ酒事

初裏一(九)みてぐらはつぶねがしらに持たせやり

秋拳

【式目】 雑 神祇(御幣)

【作者】 秋拳

【語釈】 ●みてぐら 神への捧げもの。のち、申に挟んだ絹帛などの切れ、また紙をいう。「かみまつる宿の卯の花白妙のみてぐらかとぞあやまたれける」(拾遺集・夏・紀貫之・92)。「うたふ夜のみてぐらさゆる嵐かな」(大発句帳・神楽・肖柏・7201)。●つぶね 下仕えの者。「後の月つぶねに衣を給ひけり」(月並発句帖・後の月・蕪村)。「ともなふつぶねだになくただ一人さまよひしままに」(惺窩和歌集・62・詞書)。●かしら 一群の長たる者。

【一句立】 御幣は下仕えの長の者に持たせ遣わして。

【現代語訳】(前句 我々は余韻もきれいに、酒を酌み交わして楽しむ。) 神に捧げる御幣は、下仕えの長の者に持たせて遣わした。

(加藤華)

みてぐらはつぶねがしらに持たせやり

初折裏二(十) 我がままゆるす真間の橋守

卓池

【式目】 雑 名所(真間)

【作者】卓池

【語釈】●我がまま 物事が自分の思うままになること。この句では、御幣を自分で届けずに下仕えの者に持たせた態度の事を「我がまま」と捉えているかと思われる。「下禰宜も神の威を借る我がままさ」（手折菊・88・葉派）。●真間 歌枕。下総葛飾郡国府台村（千葉県市川市）付近。『万葉集』などに詠まれた「真間之手児名」の伝説の地として知られた。また「真間の継橋」も歌枕として定着した。「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまずは通はむ」（万葉集・巻一四・東歌・3387）。「前略」真間に至りぬ。この川の少し先までは、塩のさし引きありて、真間の山の下、東の堀へ塩さし込み、それにかかりたる橋を渡り、その次に懸りたるを真間の継橋といへりとぞ。遺佚がよむ。渡れども浮世にまじる身ならねば捨てし心のままの継橋」（『紫の一本』巻二・隅田川）。●橋守 古代において、河川に架けられた橋の管理をするために置かれた役人。橋の掃除・土木や舟船の係留・燭の禁止等をした。通行人の取り締まりをすることもあり、これは近世の橋番の制度に受け継がれる。橋番の古雅な言い方としても使われる。

【一句立】わがままを通してやった、真間の橋の橋守よ。

【現代語訳】（前句 御幣は下仕えの者に持たせて遣わして、）御幣を自分で届けないというわがままを通してしまった、真間の橋の橋守よ。

（加藤華）

我がままゆるす真間の橋守

初裏三（十一）世にあはぬ恋のしなしを置く霜に

秋拳

【式目】恋

【作者】秋拳

【語釈】●世 男女の仲。また、世の中。●あはぬ ここでは釣り合わない・そぐわないといった意か。●しなし（為成・為做） 振る舞い。しわざ。しごなし。「Xinaxi シナシ（為なし）行為。例 Sonatano xinaxiniyofte cono cofoga axunatta.（々

あなたの為なしに依つてこの事が悪しうなつた) あなたのせいで、または、あなたのやり方がもとで、この事がだめになつた、あるいは、一層悪くなつた」(日葡辞書)。●置く霜に 前句の「橋」から繋がる。「霜を置く」で「霜が降りる」の意。「鶴の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」(新古今集・冬・大伴家持・620)。

【一句立】世の人の普通のふるまいに比べ、恋をしているゆえの振る舞いは、地面に降りた白い霜のように目立ってしまふことよ。

【現代語訳】(前句 我がまを許す真間の橋の橋守よ。) そうした普通と違う、恋をしているゆえの振る舞いを、橋に降りた霜のように(白々として) 人に知られてしまうことだ。

(井上)

世にあはぬ恋のしなしを置く霜に

初裏四(十二) あらはれてうき宵の里下り

卓池

【式目】恋(あはられて)

【作者】卓池

【語釈】●あはられて 隠していたことが表面化する、露見する。「つつめども涙に袖のあらはれて恋すと人にしられぬるかな」(千載集・恋一・647・中院右大臣)。●里下り 奉公人などが休みをもらつて親元に帰ること。里さがり。春、新年の詞。「里下りや野一つ越る綿ぼうし」(俳諧新選 卷之四 冬部・召波・頭巾)。「御局や里下りしては涙ぐみ」(三冊子・155)。

【一句立】(包み隠していたことを人に)知られてしまい、辛い思いをしながらの日暮れ時の里さがり。

【現代語訳】(前句 普通と違う、恋をしているゆえの振る舞いを、地面に置いた白い霜のように)はつきりと人に知られ)、露顕してしまつた事で辛い思いをしながら向かう、日暮れ時の里さがりであるよ。

あらはれてうき宵の里下り

初裏五(十三) 胸のほむらさまさば律(こはらみ) 潦

秋拳

【式目】恋(胸のほむら)・夏(律)

【作者】秋拳

【語釈】●胸のほむら むねの火。恋心や怒り・恨み・ねたみなどの気持が激しく起こることを火にたとえたもの。「むねの火」(毛吹草卷第二・連歌戀之詞)。「おもひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかす物にざりける」(蜻蛉日記・中・

160) ●律 むぐら・もぐら。蔓性の雑草の総称。蓬とともに荒れた庭園や身分低い人の住居などを象徴するものとして用いられる。季語は夏。「律 雑也。律の宿も植物也。居所に打越嫌也。いひかへて俳に二は有也。源氏、桐壺の卷に、

月影ばかり八重むぐらにもさはらすなど見え侍也。律の宿は旧地キツチの心有也。」(俳諧無言抄・315)「律トアラバ、八重

門 さしこもる さわらず」(連珠合璧集・269)。「律ムヅラ：山里」(俳諧類船集)。「なげきつ、雨も涙もふる里のむぐらのか

どのいでがたきかな」(玉葉集・雑四・2336・女御徽子女王) ●潦 にわたづみ。激しく雨が降ったときなどに、庭の面

に出来るたまり水。または、そこに雨が落ちて出来る泡。「流る」「川」にかかる枕詞。「潦トアラバ、庭ニタマリタル

水也。五月雨 雨 軒のしづく 行かたしらぬ 數まざる 玉るる」(連珠合璧集・134)。「つくづくと雨ふるさとの庭

たづみちりて波よる花のうたかた」(風雅和歌集・春下・247・前中納言清雅)。

【一句立】胸に燃える火のような思いを冷まそうとしたなら、この抑えきれない恋心は、繁茂する律や、激しい雨の後、

たちまちに広がりあふれそうになる溜まり水のようになってしまうだろう。

【現代語訳】(前句) かなわぬ恋が知られてしまい、とがめられてつらい、日暮れ時の里さがり。(胸に燃える火のよう

な、つらい恋心を冷まそうとしたならば、この気持ちには、この私の里の庭に繁茂する律や、雨後に庭にできるたまり水

のようにあふれておさえきれなくなってしまうだろう。

(加藤彩)

胸のほむらさまさは葎(にはたぎみ) 潦

初裏六(十四) 死なぬ虫なら初蟬になれ

卓池

【式目】夏(初蟬)

【作者】卓池

【語釈】●虫 前句の「胸」葎(むぐら)から呼び出される語。胸の思いを「虫」と表現している。一般的に言われる生き物の「虫」は死ぬものであるが、気持ちの「虫」は死なない。それゆえに「死なぬ虫」と言った。「虫：胸」(毛吹草巻第三 付合)「虫：胸」(俳諧類船集・むし)「葎：夏虫の声(中略)虫」(俳諧類船集)。「魂：虫」(俳諧類船集)。

●初蟬 はつぜみ。季語は夏。「にいにい蟬」(夏)：初蟬、夏蟬、こぜみ、まめぜみ むぎかりぜみ(中略)季節が本格的に夏になってから初めて声をきく蟬なので、俳句などでは初蟬として取りあつかわれている。(季語辞典)。「末夏：蟬」(毛吹草巻第二・俳諧四季之詞)。「初蟬や初瀬の雲のたえ間より」(暁台句集・蟬・475)。「頓(やが)て死ぬけしきは見え蟬の声」(猿蓑・167・芭蕉)。

【一句立】死なない虫であるならば、虫の中でも死ぬ兆しも見えず激しく鳴いているような初蟬となれ。

【現代語訳】(前句 (冷まそうとしても、葎やたまり水のように抑えきれない) 胸に燃える火のような恋心が、) 死なない虫であるならば、死ぬ兆しも見えず激しく鳴いているような初蟬となれ。

(加藤彩)

死なぬ虫なら初蟬になれ

初裏七(十五) 鶯は音を入れぎはもさすがにて

秋挙

【式目】晩夏（鶯音を入れる）

【作者】秋挙

【語釈】●鶯は音を入れ 繁殖期を過ぎた晩夏に、鶯がさえすりをやめること。季語としては夏。「音を入れる」とは鳥、特に鶯が鳴くべき季節が終わって鳴かなくなる、鳴きやむこと。ここは「入れ際」であるので、鳴きやむ間際の鳴き声であろう。「鶯音を入 月令に反舌無声とあり、拾芥に訓鶯」（増山の井・五月）。「樹も石も有のままなり夏座敷／音をいれ際のたかき鶯」（陸奥衛・1470／1471・桃隣／露茄）。「うぐひすの蟬にまけてや音を入れる」（左比志遠理・459・其足）。

【一句立】鶯は季節が終われば鳴きやむが、その鳴きやむ間際のところでも、やはり美しい音色を聞かせることだ。
【現代語訳】（前句）死なない虫であるならば、いっそ死ぬ兆しの見えないような初蟬となれ。）鶯は季節が過ぎると鳴かなくなるが、その鳴きやむぎりぎりのところでも、やはり美しい音色を聞かせることだ。

（名倉）

鶯は音を入れぎはもさすがにて

初裏八（十六）高い下駄はく戸隠の僧

卓池

【式目】雑

【作者】卓池

【語釈】●高い下駄 高下駄。修験者がはく。修験道の祖・役行者像は多く高下駄を履いた姿で知られる。「修験光明寺と云有。そこにまねかれて、行者堂を拝す。夏山に足駄を拝む首途哉」（奥の細道）。●戸隠の僧 戸隠山の僧。戸隠は長野県の北西隣、かみみのち上水内郡戸隠村の地名。戸隠山が北部を占め、戸隠神社の社僧の宿坊を中心に発展。古くから修験道場や戸隠流忍者の里として知られている。

【一句立】高下駄をはいた、戸隠の僧。

【現代語訳】（前句 鶯は鳴きやむ寸前まで高く美しい声を聞かせる。）そのホケキョウと鳴く鶯ではないが、高下駄はき高い音を立てている戸隠の僧であることよ。

【考察】鶯が、その鳴き声を法華経にたとえられることから、本句に「僧」を詠みこんだ。滑稽味あふれ、またはつきりした句境の転換となる。「異名（句ひ鳥・経よむ鳥・歌よみ鳥・金衣鳥・花見鳥・黄鳥）かつらき山。法華経。経。」（俳諧類船集）。「法花経：鶯」（毛吹草卷三「付合」）。「経によう似た鶯のこゑ／是も又うばそく優婆夷あま蛙（桃青）」（芭蕉集、〔全〕・連句編・29）。

（名倉）

高い下駄はく戸隠の僧

初裏九（十七） 稲妻を月出づるまでの想像（おもひやり）

秋挙

【式目】 秋（稲妻）

【作者】 秋挙

【語釈】 ●稲妻 季語としては秋。ここは遠い夜空がひととき明るくなる稲妻の光を言う。「稲妻トアラバ、秋の始の物也。よひの間、光のま、てらす、山の端めぐる」（連珠合璧集）。「宵のまの村雲つたひ影見えて山の端めぐる秋の稲妻」（玉葉集・秋上・いなづまを・628・伏見院）。「待つ宵の高嶺の雲の稲妻や月にさきだつ光なるらん」（拾塵集・稲妻・294）。

●想像（おもひやり） 思いを馳せること。宵の頃に光る稲妻に、やがて出るであろう月の光を思う。「宵闇の稲妻消すや月の顔」（阿羅野・626・長虹）。

【一句立】 稲妻の光で空がふつと明るくなる、その様を見て、まだ月は出ていないが、月の出た空をおもいやる。

【現代語訳】（前句 戸隠の僧は高い下駄をはいている。）稲妻の光で空が明るくなる様をながめ、山に隠れてまだ出ぬ月の姿をおもいやる。

【考察】前句の僧の高下駄は、僧がやってきた遠方が雨であることを示すか。また、花札の「坊主」の絵柄は、山にかかる月であるが、僧から月を連想しているか。

(名倉)

稲妻を月出づるまでの想像(おもひや)

初裏十(十八) 風ひやひやとはまつづら吹く

卓池

【式目】秋(ひやひや)

【作者】卓池

【語釈】●はまつづら(浜葛) 浜辺に生えているつる草。一説に、クマツヅラ科の落葉低木ハマゴウとされる。「浦風にひさ木散りしく浜つづら下はふ秋の末ぞかれゆく」(正徹千首・浜楸・870)。**●ひやひや** ひんやりとした様。「ひやひやと壁をふまへて昼寝哉」(笈日記・920)。『毛吹草』に、初秋の詞として類語「ひややか」があり、同じく初秋の詞として収載されている「稲妻」からの句の移りとしたか。

【一句立】風がひんやりと浜つづらに吹いている。

【現代語訳】(前句) 稲妻の光で空がふっと明るくなる、その様を見て、まだ月は出ていないけれど、月の出た空をおもいやっていると)、あたりは風がひんやりと浜つづらに吹いている。

(名倉)

【参考文献一覧】

特に断らないかぎり、文中に引用した和歌はCD-ROM版『新編国歌大観』『新編私家集大成』により、俳諧、『至宝抄』、『俳諧類船集』、『毛吹草』はCD-ROM版『古典俳文学大系』による。なお、万葉集の歌番号は旧国歌大観番号による。

徒然草：新日本古典文学大系『徒然草』（1989・岩波書店）

俳諧無言抄：宮坂敏夫・東明雅「俳諧無言抄 翻刻と解説」（信州大学医療技術短大部紀要 8号・1983）所収『俳諧無言抄』（東大総合図書

館旧洒竹文庫本）、

包丁聞書：群書類従第十九輯

大草家料理書：群書類従第十九輯

月並発句帖：蕪村全集 第一卷『発句』（1985・講談社）

紫の一本：新編日本古典文学全集『近世随想集』（2000・小学館）

日葡辞書：『邦訳日葡辞書』（1980・岩波書店）

連珠合璧集：『連歌論集1』（1985・三弥井書店）

稀書の会

教員

大塚英二（歴史文化学科） 久富木原玲（国語国文学科） 伊藤伸江（国語国文学科） 中根千絵（国語国文学科） 三

宅宏幸（国語国文学科）

院生他

名倉ミサ子 足立絵里奈 加藤彩 井上麻美 加藤華 美濃羽絃子 狩野一三 熊澤美弓